

帝京大学への感謝 ―任期三年を顧みて―

影山好一郎



早いもので、私が文学部史学科の教員として着任以来、任期三年が経過しようとしており、教壇に立っていてふと感慨深くなることがある。この間、帝京大学に大変お世話になり、心から深く感謝とお礼を申し上げたい。多くの素晴らしい教員・職員、学生諸兄弟に会うことができ、授業や研修等を通じて学術的な掘り下げと、私なりの成長につながるものを得たように思われ、心から幸せを痛感する。以下、この三年間を振り返って、私が感じたことを綴ってみたいと思う。

一 学校の教育方針と史学科学生としての誇りと自覚

帝京大学の建学の精神は「努力をすべての基とし偏見を排し、幅広い知識を身につけ、国際的視野に立って判断ができ、実学を通して創造力及び人間性豊かな専門性ある人材の育成を目的とする」とある。立派な社会人として通用するためには、偏見なく、広い視野と専門性の習得に努め、「社会力」「自己教育力」「専門力」という、将来の生存と繁栄のために不可欠な三要素を、この学生の時代からしつかり身につける努力の必要性を説いたものである。

私は史学科教員として常々感じていることであるが、学問はつまるところ、大きく捉えて、「歴史」と「哲学」によって成り立っているように思う。そして、「歴史」はまさに「哲学」と不可分・表裏一体であり、そうであるが故に両者を対置してこそ、それぞれが固有の輝きを放つ。「歴史」は物理的な時間軸に沿って、一瞬間の断面である「哲学」の連鎖に意義と価値を見出すことである。また、「哲学」はその時間軸上の瞬間瞬間の、人間のあらゆる生き様、ものの考え方を意味し、時間軸に沿った動きを体系的に捉えることによってこそ、その意味を放つ。ちなみに経済学も教育学も法学も医学も工学も物理学も、その断面をそれぞれの専門的視座にたって捉えているだけで、人間ないし人間とのかかわり、ものの考え方を表わした「哲学」なのである。つまり「歴史」はそれ自体、応用編としての「実学」ではなく、真正正銘の基礎編の「虚学」であって、人間の本質をえぐる普遍的な真理追求法をさすといえよう。ちなみに、経済学は経済史、医学は医学史、工学は工学史などのように、如何なる学問分野の研究も、まず歴史から入るのはそのためである。帝京大学の建学の精神は実学の習得を

一見強調しているようであるが、これら「歴史」「哲学」の“基礎学問を身につけ、その基礎の上に立って、卒業時に即戦力たれ”、“四年間在学中に、自らの頭で思索し、悩み、即戦力の知恵にしておけ”という指導を指しているということになる。

自然科学においては、仮説は繰り返しの実験によって論証される。しかし、社会科学は実験ができないため、過去の歴史に学ぶ以外にないのである。その意味で社会科学の真理探究は史実探求と等価なのである。この認識に立ったとき、歴史に学ぶ姿勢はさらに積極性と自己に対する厳しさを帯びる。それが会社就職においてもつとも求められる資質である。

史学科卒業生は他学科に比し就職内定率が小さいと耳にすることがあるが、学生諸兄弟も、また他方の採用する側の会社サイドも、ともに史学という学問に誤解があるのではないか。「歴史」に対する真摯な対峙と上記に示した学問の性格に対する解釈に深みを欠いているのではないか。だから手先・目先の専門性や術的な利便性を目を奪われ、これらを優先した捉え方に陥りやすいのではないか。会社に入って不可欠なことは、たえず生起する問題の本質を、正しく掌握し解決法を創造できる能力である。歴史は未解決事案・事件発生との連鎖であり、その因果関係の真摯な掌握能力こそ生きた知恵に昇華できる可能性に満ちているはずなのである。いかに困難な問題でも、過去の事例・史実に照らし、その因果関係を構築し、現状の問題との類似性と異質性を見極める、結局人間の本質の掌握にまで掘り下げ、そこに感動できる豊かな人間性こそ求められるのではないか。自らのこととして対峙し最適解を求めようとする人材は、会社にとっても垂涎の対象たる人材ではないか。この意義を知ることによって、史学科学生の気風も学ぶ姿勢も変化し、自ら実社会に役立つ人間形成への道を歩き始めることがで

きると思われる。

二 担当した専門科目と私のライフワーク

私は前所属大学（防衛大学校防衛学教育学群）時代からもち続けているライフワークがある。それは、“日本は、結果的になぜ、勝算も終結の目途もない太平洋戦争に突入する道を選んだのか？”である。この答は少なくとも開国以降の日本の近代化と戦争の連関を体系的に捉える必要があり、短兵急には得られないといえよう。複合した要因の絡みをうまく整理し、総括し、個々及び全体の説明を必要としている。私は帝京大学に赴任して以来、新たに痛感することが三つある。

その一つは、防衛、軍事、安全保障の問題に普段から接触することがほとんどない民間大学の帝京大学において、講義をすることの意義と価値である。防衛大学校では基礎的な知識を有している上での講義が行えるが、本学では、まずなぜ自らを守るのか、家に鍵をかけることになぞらえた防衛の概念から説く必要に迫られた。それは、「武」の本質を私自身が再考させられることであつて、新たな触発剤を得たのであつた。それは、私が鍛錬中の剣道の理合い（剣捌きの上で必要な理論）を基礎から紐解くことであり、価値の再確認であり、私にとつて大きな喜びであつた。そしてそれはさらに、孫子の兵法、軍事思想家の理論・理念を再考する刺激となり、整理統合することにつながっている。つまり、かつてあまり意識してこなかった基本に立ち返ることによつて、知識の底辺の広がりと体系化が加速されたように思う。それは人間の本质に一步迫る長所を再発見させられるという

ことである。本当に分かったといえる領域に近づくことといえるかもしれない。初心者に教えるということは、学ぶ姿勢を本物にするように思う。

その二つは、毎年同じ講座でも、継続して聴講する学生の存在である。

例えば「戦争史」といっても、翌年度には同じ教材資料をそのままには使えないということであり、それは、新たな視点ないし知見を広め、自らの活性化を図る必要に迫られるということである。たえず自分を叱咤激励し、継続研究が必要となる。正直のところ自分の専門研究の進捗には多少のブレイキにはなるものの、新たな発見を求める喜びがあるということである。その発見は自分の研究正面に必ずプラスに働く。これは年々、授業が楽しいものであり続け、ライフワークの答の深さを育む好材料となった。有難いことである。

そして最後の三つ目は、ことに私にとって有益であったことは、ゼミ「日本史演習（テーマ：太平洋戦争への道）」を専攻した学生諸兄妹であった。この学生は私の在任三年の間、少なくとも私の授業科目のうちの三つ、「戦争史」、「日本史特殊講義」、「日本史演習」を複数選択したものが多く、近代史の軍事・戦争、安全保障関係テーマに熱意のある学生たちであった。彼らは顔なじみであるだけでなく課題を解く為に、積極的であった。私の部屋に再三来訪し、史資料の紹介を求め、分析法やグループ討議要領等に関する質問や議論を投げかけてきた。これはその時々に応じて対応し指導に当たったが、それは考えてみると、私自身のライフワークの進捗の促進剤にもなっていることに気付いた。学生は、私があとで読もうと思つて未だ十分に読んでいない資料を発見してきたり、まったく別の角度からの質疑をしてきたりして、私としても参考になった。教える立場に立つてはじめて、学ぶ環境を得るとはこのことであろう。海軍・陸軍、人物、日本と中国・第三国等の様に、複合的観察を

もって思考を深め、太平洋戦争への道に、幅と色合いを深める。有難いことである。

これは以上の三科目にとどまらず、残余の三科目である「日本史（通史…一般基礎教養科目）」、「ライフデザイン」「人文演習」においても然りであった。つまり、大学教育の担当に関しては、よほどの課題面で離散・飛躍的考え方に立たない限り、無駄なもの一つもないということである。

三 学生諸兄弟の指導を通じて

(一) 学力増強について

帝京大学の学生の気風について、卒論、授業、ゼミ等を通じて痛感する事は、多くは素直で真面目で明朗であるということである。これは実社会に出て大変重要なことであるが、更なる必要な資質・能力を求めて、以下の四つの点について学生諸兄弟の努力の必要を感じている。

一つは、**目標をもち、その達成にまつわるものに関して、強い疑問を抱くことである。**やる気は、目標を真剣に持つことで決まる。そして、疑問をもつことはすべての思考の出発点であり、実態を正しく把握することであり、解決の基本となる。しかも途切れない思考によって、得られた知識は蓄積され、体系化の基本となる。知能ロボットや人間の限界に挑戦するコンピュータ技術が進歩するのは、すべて記憶能力をベースにして、目標に到達すべく如何に学習し、高度のアルゴリズム（モデルの表現）を形成するにかかっている。目的をもった人は強く、中心軸がぶれることがない。

二つは、目標達成に必要な手段において、関連要素との相互連関を捉え、総合化して解決を図る執念である。真剣に目標を設定し解決の道を模索するためには、その人が如何に真剣な問題認識をもっているかにかかっている。偏見を排し広い視野に立つということは、もともと物事は関連要素が複雑に絡み合っているため、その連関と全体を正しく把握するセンスを不可欠としているということを意味している。複雑な問題ほど解決に創造性と柔軟な発想を要する。問題解決の執念はこの自覚と行動の持続性をいう。人は困難に遭遇するほど強くありたい。面白いことに、この持続性は、努力と成果が、その問題解決に直接寄与するという喜びに留めず、その貴重な体験が自己を高めるのだという人間形成への自覚によってより強いものとなる。この向上心、人間形成への道への努力の自覚があるかないかが、その人の問題解決への執念を生むのではないかと思う。

三つは、豊かな物差し（視点）をもつことである。ものの本質は何かとか何かを比較しなければ把握できない。因みに日本のことばかり見ていては日本の本質は分からない。重要なことは、一つの問題を解決するためには、例えばその問題の「過去と未来（例…江戸時代と昭和期）」、「日本と外国（例…日本とアメリカ）」、「子供と老人」、「男性と女性」、「演繹と帰納」、「基礎と応用」、「ハードウェアとソフトウェア」、「自然科学と社会科学」、「田舎と都会」、「理論と実践」等々、たくさん存在する尺度をもち、しかも、その問題の内容、時、場所に依りて妥当なものを選び、比較分析することである。比較による相違点、類似点の抽出とその意義付けによって、その問題の本質が分かるということである。これは在学中の勉強姿勢そのものに留まらず、学生諸兄弟が卒業して就職先から期待される様々な課題解決の対処法そのものでもあるからである。よい研究ができる人はよい仕事ができる人なのである。

最期の四つ目は、“生涯使えるノート”を作ることである。大学時代にじっくり身につけるべきことは、基礎学力である。これを身につける最短距離は、上記の二つの要素を身につけると同時に、その努力の過程を毎日毎日、目に見える形に蓄積していくことである。それは決して難しく考えるのではなく、毎日の講義や読書結果、友人・先生・先達との会話内容、テレビ・新聞報道から得た情報、発表や報告に受けたコメント、毎日の自己の反省事項、教訓など、日ごとに得られる関連情報を、特定のキーワードを設け、それに沿って整理し、蓄積し続けることである。筆記が難しければコピーしてカードに張り付ければよい。その記録媒体は因みに小型のカード（B6版）があり、必要に応じ、電車の中でも、どこでも読み直し、確認し、知識をリフレッシュすることも可能であり、新たな情報を付け足すことができる。つまり、古くしていつも新しいノートなのである。この継続が、いつでも基礎学力の向上につながり、自己の自信に繋がることになるのである。

（二）玉を磨くということ

帝京大の学生諸兄弟は、磨けば光る学生が多いと感じているのは私ひとりではない様に思う。ことにゼミを通じてその感が強い。ということは真剣に学問に対峙し、問題設定と調査方針、分析の枠組設定、分析・総合手法、論文構成と注の構成・作成などに関する指導を徹底すれば、学生の潜在的な能力が呼び起こされ、素晴らしい論文を作成することができる。当該学生は幼少からこれまでの間に磨かれるという意味を考える環境も機会も得なかったことを意味しているのであるが、気がついた時が最善の時なのである。人それぞれに運命や道をことにしており、それはそれで受け止める以外にない。ことに卒論を担当するに際して、磨くことの喜びとそのような学

生との出会いに嬉しく思うのである。

よく卒論は後期からやればよいということを学生から聞くことがあるが、卒論は就活の重要な手段と位置づけ、表裏一体の課題として真剣に取り組む必要がある。会社側の人事担当者は、面接において、就活一辺倒で卒論を疎かにし、複数の仕事をこなし得ない処理能力の低い人間は採用に値しないと判断するであろう。むしろ本分である卒論をも全力投球して取り組み、研究現状に関する質問に、生き生きとした目の輝きと熱意ある応答姿勢に心打たれ、採用に有効な要素として扱うであろうと思う。大学時代は遊びとともに、卒論は“命がけで学ぶ”集大成なのであり、この貴重な経験が将来の自分を支えることを忘れてはならない。

(三) 歴史に学び、真の教養を求める

授業の中で、私が強調してきたことは、日本の歴史から如何なる本質を読み取ることが出来るか、それを読み取る姿勢を身につける努力をすることであった。これを抽出することは簡単なことではない。歴史の本流は「国際協調」であるといえる。国家といえども個人と同じように、平素から信頼を築き、周りと仲良くして、如何なる時も利害の違いを暴力・武力によってではなく、話し合いによって解決を図るということである。如何なる時もお互いの立場を理解し、紛糾や戦争を避けるといふ努力が必要なのである。これが人類最高の叡智であり、真の教養といえよう。ということとは、平素から相互の信頼を構築し維持することによってこそ、いざという時にその真価と底力が発揮できるのであって、言い換えれば、如何なる時も、互いに信じていることが出来る文化を築くことそのものが生きることの本質であって、教養はむしろこの「生存の哲学」ということを意味する。

さて、ここで、一つの懸念材料が生起する。それは、では、相手が不純な動機や姑息な手段で、こちらを欺くような働きかけがあった場合は、こちらはどのような態度をとるべきかという命題である。それは、まずもって相手自体に協調の基礎条件を欠いているのであり、そのような事態に遭遇した場合は、別の対応である「防衛」に徹しなければならぬことはいうまでもない。防衛には真の実力と胆力と勇気がある。相手に騙されない能力も実力のうちなのである。つまり、防衛は相手を正しく観察し、客観的な対応法を見出すという極めて高度な知的活動である教養が不可欠である。それでも暴力や武力をもつてこちらを侵略しようとする場合には、武力以外の如何なる手段も無力である。こちらがもっている武力で、有効且つ可能な戦略のもとに、確実に相手を撃破する決心も教養なのである。つまり「防衛」は平素から可能な方法で自らを守る実力（武力も含む）と勇気と叡智が不可欠であることを意味している。文武両道はこのことをいっている。

そこで、また一つの疑問が起こる。こちらが平素から用意すべき国家の場合の武力・軍事力、もつと広義に言えば、個人の場合、もつべき実力とはどの程度のものかという限度の問題である。結論をいえば、武力・軍事力はそれ自体が問題なのではなく、それを使う人間が問題なのである。防衛は最小限度のものであつて、それ以上の保有は、防衛からかけ離れた国家の問題解決の手段としての積極的な武力使用に陥りやすい。人間は神様ではないので、ここにあらゆる関係者の不純な動機が入り込みやすく、過去の日本においても、常に国民はこの災厄に打ちひしがれてきた。これらの顛末は日本の歴史がそれを如実に示している。

真の「防衛」は、その時その時に、なすべきいわゆる「分相応」の役割や務めを正しく見極め、果たさなければならぬ。ということとは「分」にふさわしくない行動を慎み、極力無駄を省き、なすべきことに集中して必要

な実力を養うという高い知的活動が求められ、それが真の教養として蓄積・構築されるのではないか。若い時代には何が無駄かを知るためにも、無駄が必要だともいえる。しかし、「分」の自覚とその体現の努力こそ、結局、社会や国家の中で信頼を勝ち取る有益な生き方に繋がるのではないかと考えられるのである。

おわりに、高齢の私を採用していただき、次代を担う若い世代の学生諸兄姉に接触する機会を与えてくださった帝京大学沖永佳史学長をはじめ史学科長南啓治教授他学科各教員、並びに関係の方々、学生諸兄姉に深く感謝申し上げます、限らない帝京大学のご繁栄を心から祈りつつ擲筆したい。

略 歴

氏 名 影山 好一郎(カゲヤマ コウイチロウ)

生年月日 昭和一七年一月二日生 (満七十歳)

※ 男

年 月

学歴・職歴など

昭和四〇年 三月 防衛大学校本科卒業(第九期生:電気工学)

同 四一年 三月 海上自衛隊幹部候補生学校卒業(第一六期生)

同 四六年 三月 防衛大学校研究科電子工学科卒業(電子計算講座 第八期生)

同 四六年 四月 自衛艦あづま艦長付 高速標的機艦上追尾誘導装置担当

同 四八年 一月 海上自衛隊第三術科学校 幹部中級航空装備整備課程学生

同 四八年 二月 海上自衛隊第三術科学校 総合整備科教官

同 五一年 二月 海上自衛隊第三術科学校幹部専攻科 航空装備整備課程学生

同 五二年 四月 海上幕僚監部防衛課防衛班(P3-C導入プロジェクト担当)

同 五五年 八月 海上自衛隊鹿屋教育航空群第二〇四支援整備隊検査隊長

同 五八年 七月 オーストラリア統幕課程学生(第二四期)入校

同 五八年 二月 海上幕僚監部防衛課編成班(定員担当)

同 五九年 二月 海上自衛隊幹部学校高級課程学生(第三〇期生)
 同 六〇年 二月 防衛大学校教授(海上防衛学教室)
 同 六二年 八月 統合幕僚会議事務局第四室 長期班長
 平成 元年 八月 海上自衛隊第二航空群第二支援整備隊司令
 同 三年 八月 防衛研究所戦史部所員(第一戦史研究室)
 同 七年 四月 防衛研究所戦史部 主任研究官
 同 九年 二月 防衛研究所戦史部 定年退職
 同 一〇年 四月 防衛大学校教授(海上防衛学教室)
 同 一三年 一〇月 防衛学教育学群副学群長
 同 一七年 四月 防衛大学校 図書館長兼教授
 同 一九年 三月 防衛大学校定年退職
 同 二一年 四月 帝京大学文学部史学科 教授

その他

- ① 軍事史学会「阿南高橋賞」受賞、平成九年六月
- ② 軍事史学会副会長・理事

著書（共著）

- ① 同台経済懇話会編『近代日本戦争史 第三卷』（共著）、東京堂出版、平成七年四月
- ② 軍事史学会編『日中戦争の諸相』（共著）、軍事史学会・錦正社出版、平成九年一二月
- ③ 横浜対外関係史研究会編『横浜英仏駐屯軍と外国人居留地』（共著）、横浜開港資料館・東京堂出版、平成一一年三月
- ④ 防衛大学校防衛学研究会編『軍事学入門』（共著）、防衛大学校防衛学研究会・かや書房、平成一一年六月
- ⑤ 海軍軍令部編『昭和六七事変海軍戦史 全五巻（復刻版）』監修・解説（共著）、緑蔭書房、平成一八年七月
- ⑥ 『佐世保市史（軍港編）上・下巻』（共著）、佐世保市、平成一四年四月

主な論文

- ① パワーバランスのメカニズムと海洋支配力「政治経済史学」通巻第二五四号、政治経済史学研究所、昭和六二年六月
- ② 鎖国と日米和親条約、「海軍史研究」第一号、海軍史研究会、平成三年三月
- ③ 第一次上海事変の勃発と第一遣外艦隊、「海軍史研究」第二号、海軍史研究会、平成四年三月
- ④ 満州・上海事変の対処に関する陸海軍の折衝、「政治経済史学」通巻三一八号、日本政治経済史学研究所、平成四年一二月
- ⑤ 大山事件の一考察、「軍事史学」通巻第一二七号、軍事史学会・錦正社出版、平成八年一二月

- ⑥ 海軍軍令部権限強化問題「海軍史研究」通巻第四号、海軍史研究会、平成九年十月
- ⑦ 「広田三原則」の策定をめぐる外務、陸、海軍の確執、「日本歴史」通巻第五九五号、日本歴史学会・吉川弘文館、平成九年一二月
- ⑧ 海軍の強硬化と満州事変、軍事史学会編『再考・満州事変』、錦正社、平成一三年一〇月
- ⑨ バルチック艦隊の極東派遣に伴う海軍戦略の実相―『千九百四・五年露日海戦史』を中心にして―、「波濤」通巻第七九号、海上自衛隊幹部学校、平成一七年七月
- ⑩ 国際連盟と第一次海上事変、記念論文集『安全保障学のフロンティア―二一世紀の国際問題と公共政策』、明石書店、防衛大学校社会科学館、平成一九年三月ほか省略